

Title	根岸 佶先生年譜
Author(s)	内田, 直作
Citation	一橋論叢, 32(4): 493-499
Issue Date	1954-10-01
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/4226
Right	

根岸 佶先生年譜

明治七年（一八七四）

八月九日、紀州藩士根岸覺之助の長男として和歌山市宇治に生れた。

明治二十二年（一八八九）

四月、和歌山縣立尋常中學校に入學した。入學の翌年（一八九〇）日清貿易研究所（後の東亞同文書院）の創設者荒尾精の清國講演の熱辯に接しその後の中國への關心を深めてゆく端緒となった。

明治二十八年（一八九五）

四月、和歌山縣立尋常中學校を卒業、宿志の日清貿易研究所への入學は家庭の事情により斷念し、九月上京して高等商業學校本科に無試験入學を許された。苦學力行學校から資金貸與をうけ、澁川流柔術道場に寄宿し、後には師範代をも勤めた。道場の同輩には島蘭順次郎（東大内科）、田崎慎治（前神戸經濟大學長）等がいた。

明治三十二年（一八九九）

七月、高等商業學校本科卒業し、専攻科に入り、貿易科に屬した。専攻科では水島鎮也教授の後援のもとに、三浦新七、上田貞次郎、田崎慎治、津村秀松、内池廉吉、津田五郎等の同人とともに月刊雑誌「商業世界」を編輯執筆し、同文館から刊行した。中日貿易を専攻し、研究資料を得るため對華關係の先覺者近衛篤磨公（霞山）が明治三十一年（一八九八）に創設した東亞同文會に入入した。卒業に先づ明治三十三年（一九〇〇）末には、研究資料収集のため獨自中國に入った。拳匪の亂直後でほとんど得るところなく歸朝したが、すでに當時東亞同文書院教授に内定していた。卒業論文は中國の水運についてであった。

根岸 佶先生年譜

明治三十四年（一九〇一）

七月、高等商業學校專攻部貿易科を卒業し、八月、根津一（山洲）が日清貿易研究所に倣い設立した東亞同文書院教授として上海に赴任した。赴任の年は前年の明治三十三年（一九〇〇）五月、金陵に創設された南京文書院が拳匪の亂を避けて、三十四年八月上海高昌廟桂墅里に移り、東亞同文書院に改名したときに際會していた。當時の書院長根津一のもとで、まず着手したことは中國經濟事情の實地調査であつた。揚子江流域の各都市、北京、天津、旅順、大連のほか山東、直隸、福建、廣東各省の主要諸都市を踏査し、その間北京に光緒會計録の著者李希聖を訪ね、上海董家渡の米問屋周廉生に中國簿記の教えをうける等の實情把握の努力が拂われた。この桂墅里時代の明治三十六年に上州の人室橋智子と結婚し、後に二男一女をあげた。独自の實地踏査について、學生を動員して中國經濟の組織的な實地調査を試みることを根津院長に建策し、外務省の補助三萬圓をえてその實現をみた。華語に通ずる上級學生を動員し、夏期休暇の内地大旅行により全十八省を踏査させ、七年間にその報告書は十餘萬枚に達した。明治四十年（一九〇七）、その一部を補修し、「支那經濟全書」と名づけ、十二輯を公刊した。その後、大正年間初頭に同文會はそれに基つき、さらに「支那省別全誌」十八巻を出版した。右の編輯のほか、自著として明治三十九年（一九〇六）、清國商業綜覽全五巻を丸善書店から刊行した。

明治四十年（一九〇七）

四月、東亞同文書院の教職を辭して歸國し、書院の母體である東亞同文會の調査部主任に依囑された。松本忠雄等とともに月刊「支那經濟報告」を編輯執筆した。

明治四十一年（一九〇八）

九月、東京高等商業學校講師となり、東洋經濟事情を擔任した。

明治四十四年（一九一一）

十二月、東京朝日新聞政経部記者に就任した。擔當は、當時としては異例な中國關係のみの専門記者であった。朝日記者としては大正五年（一九一六）十二月まで在職した。退職後も歐米留學中を除き同社客員として今日におよんでいる。

大正三年（一九一四）

六月、東亜同文會幹事に依囑された。幹事長は根津一で、幹事には小川平吉、柏原文太郎等がいた。同會幹事としては高等商業學校教授就任時までにおよんだ。

大正五年（一九一六）

三月、臨時臺灣舊慣調査會より華南における商慣習、およびその變遷調査事務を囑託された。十二月、東京高等商業學校教授に任ぜられ、高等官六等に敍せられた。

大正六年（一九一七）

一月、正七位に敍せられた。

大正八年（一九一九）

一月、高等官五等に、二月、從六位に敍せられた。

三月、外國留學のため東京出發、同月、東京商科大学附屬商業専門部教授に任ぜられた。まず、アメリカに渡り、ワシントンに根據をおき、約一年間主として國會圖書館で中國關係の外交史研究に従事した。ついで、英京ロンドンに滞在し、大英博物館を中心として中國の古典を涉獵し、一方、イギリスの植民地制度を研究した。歸途、ヨーロッパの獨、佛、和、伊、白、瑞西の大陸諸國を歴遊した。

大正十年（一九二一）

根岸 信先生年譜

一橋論叢 第三十二卷 第四號

一月、東京商科大学教授兼専門部教授に任ぜられ、高等官四等に叙せられた。

七月、ヨーロッパから日本への歸國に際しては、途中シンガポールに十八日間、上海に約一ヵ月間滞在し、研究調査の上歸朝した。歸朝後は東洋經濟事情のほか、新たに東洋外交史をも擔當した。

九月、正六位に叙せられた。

十月、ワシントン軍縮會議へ加藤友三郎、幣原喜重郎、徳川家達全權の隨員として同行した。分擔任務は中國關係であった。

大正十一年（一九二二）

二月、ワシントン軍縮會議から歸朝した。歸朝後、東亞同文會理事に就任した。會長は牧野伸顯、副會長は近衛文麿、理事長は白岩龍平であった。東北事變後、近衛文麿が會長となり、軍部關係理事と交代するまで在任した。

大正十二年（一九二三）

八月、高等官三等に、十一月、從五位に叙せられた。

大正十三年（一九二四）

二月、専門部教授の兼官を免ぜられた。

大正十四年（一九二五）

十一月、「支那の同郷團體」を東京商科大学創立五十周年紀念論文集（商學研究第五卷第二號）に發表した。

大正十五年（一九二六）

「支那特別關稅會議の研究」を自強館書店から刊行した。この當時は外務省の調査にも協力していた。

五月、高等官二等に、六月、正五位に叙せられた。

昭和三年（一九二八）

十月、勳四等に叙せられ、瑞寶章と大禮紀念章を授けられた。

昭和六年（一九三一）

七月、高等官一等に、十一月、從四位に叙せられた。十二月、勳三等に叙せられ、瑞寶章を授けられた。

昭和七年（一九三二）

十二月、「支那ギルドの研究」を斯文書院から刊行した。同研究の後半の新式團體に關する部分は印刷に附されなかった。

昭和八年（一九三三）

十二月、「支那ギルドの研究」をもって、三浦新七、幸田成友兩教授の審査をへて東京商科大学から經濟學博士の學位を授けられた。

昭和十年（一九三五）

三月、停年につき東京商科大学教授を依願退職した。同月、東京商科大学講師を囑託された。四月、正四位に叙せられた。

昭和十一年（一九三六）

二月、東京商科大学學生課長心得を命ぜられた。

昭和十二年（一九三七）

二月、願いに依り學生課長心得を免ぜられた。

根岸 信先生年譜

昭和十四年（一九三九）

この年、東亜研究所第六調査委員會學術部委員會の委員を依頼された。委員長は山田三良で、田中耕太郎主任の商事慣行調査に属した。後には末弘巖太郎主任の農村慣行調査にも協力した。

昭和十七年（一九四二）

四月、「華僑雜記」を朝日新選書3として朝日新聞社から刊行した。本書は文部省、その他の推薦をえた。

昭和十八年（一九四三）

六月、東亜研究所第六調査委員會學術部委員會に、商事に關する慣行調査報告書として「合股の研究」を提出し、「資料甲第二十三號C」として發表された。本稿は後に鎌倉書房から出版される豫定であつたが、その實現をみなかつた。

昭和二十二年（一九四七）

終戦前、東亜研究所第六調査委員會の農村慣行の部で擔當していた報告の成果である「中國社會における指導層——耆老紳士の研究」を平和書房から刊行した。書肆の都合で前半だけが出版され、後半の部分は未發表のまま原稿として残存している。

昭和二十三年（一九四八）

十一月、先の「合股の研究」につづく中國商事慣行調査の成果としての「買辦制度の研究」を日本圖書株式會社から刊行した。

昭和二十五年（一九五〇）

七月、一橋大學、東京商科大學客員（名譽）教授の稱號を授與された。

昭和二十六年（一九五一）

四月、「上海のギルド」を日本評論社から刊行した。十二月、学校教育法第六八條の二の規定により、一橋大學名譽教授の稱號を授與された。

昭和二十八年（一九五三）

四月、「中國のギルド」を日本評論新社から刊行した。なお、それは先の「支那ギルドの研究」の再刊ではなく、新しい見地からの書卸しの研究であった。

昭和二十九年（一九五四）

前年刊行の「中國のギルド」は日本學士院の審査により、學術進歩に著しい貢獻をしたものと認められ、五月十二日、天皇陛下臨席のもとに、法學博士山田三良院長から、賞狀第百二十九號により日本學士院賞賞牌および賞金を贈られた。この年八月九日をもって満八十歳に達した。現在は神奈川県逗子市小坪三六に、二男國義家族とともに居住し、中國の商人ギルドについて執筆中である。

ことわり 本年譜は事情により切迫した日時のもとに作成されたため、新聞記事、論文等にいたるまで十分に記録しえなかつたことを諒承願います。

内田直作